

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成25年1月 第143号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

謹 賀 新 年

—想像と創造を支える介護を目指して—

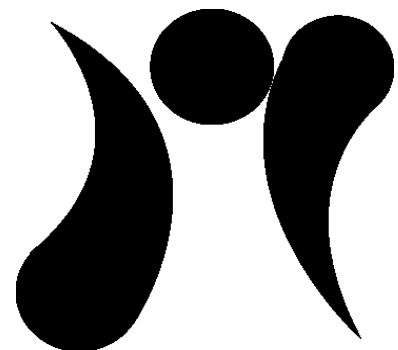
平成25年の初頭に当たり心も新たに、老いて人生を締め括る営みが新たな生命の誕生につながり、次の世代に社会を引継ぐ為の極めて創造的な営みである事を心に留めて、改革に向けた事業展開を図りたい、と祈念いたします。

長寿は人類の夢。そして日本は今、世界有数の長寿国。しかし幸福度調査では世界で90位。国の負債が983兆円。生まれる子供が減り続け、100年後には人口が5,000万人を切ると云われます。永く生きた命が次の世代に命をつなぐ為の、何かが足りない。極めて深刻な課題です。

団塊の世代の大半が人生を締め括るまで、あと30年。この世代が今と同じ医療・介護・年金の制度で暮らすなら、国の負債が増え続け、債務超過の極めて悲惨な状況が予測されます。今を生きる為の資金は、今の世代で始末を着けておきたい、と団塊の一員として切に願います。

老いに連れて心身の機能は確実に失われますが、感性・感覚は最期の瞬間まで失われずに暮らしに伴走します。認知症になって知力や体力が著しく低下しても、感性や感覚・感情は豊かに反応し、本人らしさを発揮します。生きる力を失って行く老いの過程は一方で、生きる喜びや楽しみを周りの環境や関係に見いだす、しなやかで逞しい生命力を用意しています。季節の変化を感じ、人の気配や暮らしの雰囲気包まれて、生きる喜びや楽しみを見いだす力を五感に蓄え、課題に向き合い懸命に対処しています。その懸命な生きざまが、次の世代に向けて贈る老いの貴重なプレゼントです。

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

身体機能の全てを失い栄養も水分も摂れずに、ただ身を横たえるのみに見えても、五感のどこかが何かを感じて心が動き、想像力が働き、喜びを見つけて生きている事を実感し、安心して他者に身を委ねて最期を迎えます。無防備な姿で他者に身を任せて主役として人生を締め括るその姿が、次世代の心に宿るメッセージを生み、命と暮らしをつなぎ、新たな生命の誕生と育児を支える思想を育み、連綿と社会が引継がれていきます。次世代へのメッセージを創り出す最期への営みと、其れを支える介護の役割は、極めて重要です。その原点となる思想や理念が根底に流れる介護保険制度であって欲しいと願い、予防重視から最期を重視する制度への改革を心より望みます。

失われていく心身機能に焦点を合わせるのではなく、五感を磨き、五感に応える想像力を育み、創造性を発揮するしなやかな生命力を支える役割を、介護が担います。想像と創造を支える介護を目指して、五感に働き掛ける生活環境を大切にしたい、と心より願います。

人の気配、窓から見える雲の様子、外気の寒暖の差、調理の音や匂い、掃除・排泄・入浴のお世話等々、日々のさり気ない現象や生活行為の中に五感を刺激する何か潜んでいます。元気な頃にはやり過ぎた何気ない生活の何処かに、感性が働き、感覚がよみがえり、しなやかな生命力が反応して、次世代への貴重なメッセージを生み出します。人は老いて、しなやかに逞しく変身を繰り返しながら自然に還り、次の世代の命を養います。

永く生きた命が自然に還る途に寄り添う介護の場には、自然の中を自由に動き回る野生動物が備える敏感な全方位のアンテナと同様の、鋭い感性や感覚が重要な役割を果たします。心身の機能が失われて行く老いの途で現れる、五感に応える微細な動きや微妙な変化に気付く為の鋭い感覚が、介護者には必要です。身を包む大気にも、身の周りを彩る草木にも、すれ違う人々にも関心を寄せ、日常の暮らしの中で五感を磨く努力を繰り返したい、と願います。そして、老いの現実を自然体で受け止める感覚を養い、命と向き合う思想を育み、しなやかな生命力に応える途を探ります。

自然の一員としての感覚を忘れず、社会の一員としての責任を忘れず、課題や負債を先送りすること無く今為すべき事を見極め、最善を尽くして取組み、次の世代には幸福度の高い社会を引継ぎたい、と願っています。

せいりょう園 渋谷 哲

せいりょう園待機者状況

<平成25年1月9日現在>

- 入所判定済み者 420名 (グループの内)
 - Iグループ…148名 IIグループ…161名 IIIグループ…111名
- 入所判定済み者の現状状況
 - 在宅174名/特別養護老人ホーム入所中12名/ケアハウス入居中5名
 - 老人保健施設入所中99名/障害者施設2名/医療機関入院中110名
 - グループホーム入居中13名/所在不明5名
- 辞退その他 せいりょう園入所1名/他施設入所4名/死去7名



～ADL研修の目指すもの～

[ADL研修講師：理学療法士 藤林 英樹先生]

せいりょう園ショートステイ
介護福祉士 富田 徹

せいりょう園では看取りケアを行っています。介護職として、日々ゆるやかに、少しずつ変化しながら最期の場面へと向かわれる利用者様の側に寄り添い気づくこと。それは、死は決して避けられないということ。そして、その過程において、身体の衰えは自然であるということです。

今日を元気に歩いておられる方も、いつか筋力が衰え歩けなくなり、ご自身の手で食される毎日の食事、やがて誰かの手が必要となり、いつしか食事さえも喉を通らなくなる、そのような日が訪れます。その事実を悲観せず、ありのままの姿を受け容れ、それぞれの今もてる力を存分に活用し、最期まで自分らしく、豊かな日々を送って頂けるよう私たちにお手伝いできること、そして、その方にとっての理想的な生活スタイルや生活動作、介助方法を考え、学ぶ場として、せいりょう園のADL研修があります。(毎月1回開催)

せいりょう園で扱うADL研修では、衰えた筋力の回復を目的としたようなりハビリ(機能訓練)的なことはしません。あくまでもその方のもつ力の範囲内で無理なく行え、ご本人の状態や意思に沿った事柄に着目し取り組みます。例えば、自身で食べる力があるのに、食事しやすい姿勢を保てないことで介助機会が増えた、腕や足の関節が硬く縮こまりスムーズな介助動作が行えず痛みが生じている。短い距離なら歩行できる筋力があるが常時車椅子を使用しているなど、生活の中にある問題点に目を向け何か新しいアプローチをすることで、上手く活用できていない能力を生かし、出来ないことが改善され、心身の苦痛の緩和やQOLの向上につながることを目標として、課題を上げ理学療法士の指導のもと、ご本人と家族を交え、その方にとってのベストな介助方法、サポートのあり方を学び、実践しています。

思いどおりに、自由に動いていた身体は衰え、いつか消えます。楽しい日々も、やわらかい時間も、笑い声も、温もりも、いつかは消えます。いずれ訪れるその最期を、広く、穏やかな気持ちで迎えて頂けるよう介護職としての私たちにできることを考え探し、行動し、毎日の状態や様子の変化を確かめ、感じながらケアにあたると共に、最期まで持てる力を余すことなく発揮し、生きる楽しさや喜びを少しでも感じとって頂けるようなお手伝いができるよう、日々努力していきたくと思います。



初詣(1月11日)



特養とグループホームの利用者の方々に浜の宮神社に初詣に行きました。神主様にお祓いをしていただき一年の無事や健康を祈る、とても神聖な時間でした。

その後は、おみくじを引き、何が書かれているか、皆さんじっと読まれていました。





テーマ「抑制拘束をしないことについて」

せいりょう園老人介護支援センター
社会福祉士 吉田 知一

ここ最近の語ろう会では、介護技術を中心に皆さんと語ってきましたが、今回は抑制拘束についての考え方について皆さんとお話しました。

【身体拘束・抑制とは・・・】

介護を行う場面で起きている身体拘束・抑制とは何かについて考えたいと思います。介護の世界では2001年に国が介護保険施設等へ向け「身体拘束ゼロへの手引き」を作成し身体拘束廃止への取組が具体化しました。

「身体拘束ゼロへの手引き」の中にある抑制拘束として個別事例で挙げられていた事例を紹介したいと思います。

- ・ ベッドからの転落防止の為にベッド柵等について
- ・ カテーテル抜去防止の為にミトン型手袋について
- ・ 車椅子の腰ベルトについて
- ・ 脱衣やおむつはずしを制限するために、介護衣（つなぎ服）を着せる
- ・ 行動を落ち着かせるために、向神経薬を過剰に服用させる
- ・ 自分の意志であけることの出来ない居室等に隔離する

などなど

上記の行為を身体抑制の具体例として挙げています。

これらの事例が参考事例となり、身体拘束・抑制の目安にすることは良いと思いますが、何を身体拘束・抑制とみなすかによっては、行為の意味が違って来るように思います。例えば、脳梗塞などの脳血管障害を患い、自分の意志とは別に体が動いてしまう不随意運動のある方は、すべり座りになりやすく車椅子から転落してしまう恐れがあるので転落予防の安全ベルトを着用する場合があります。その場合は、本人の意思とは関係のない脳の機能障害が起す行為である為、身体拘束にはならないといえます。また、高齢者施設の多くは、当たり前のように玄関に鍵をかけていますが、目的が本人の意志や行動を制限することになると本人の安全や安心を守っているかに思えることも抑制・拘束になります。

身体拘束は、行なわれた行為だけで見るのではなく、その行為の目的が利用者の行動を制限し、そのことが利用者のストレスに繋がっているか否かということが重要になります。これにおいては、例え認知症の方であったとしても、行動を制限しても良いという考えには至らない訳です。

【緊急やむを得ない状況とは・・・】

緊急やむを得ない状況では、一時的にご本人の自由を拘束・抑制する場合があります。例えば、階段を車椅子で降りようとしている方がいらっしゃれば、降りないように止めますし、ベッドの上で立ち上がろうとする方がいらっしゃれば、座ってもらいベッドを低床にして様

子を見守ります。

緊急やむを得ない状況において、ご本人にとって何が緊急に値するのかを見極める必要があると思います。転倒の危険性のある方が車椅子から立ち上がった場合、どれくらいの支持力のある方なのか、またどのような行動を普段からされている方なのか、状況や行為だけで判断をするのではなく、ご本人の持つ個々の力によって判断できるように日々の観察が必要だといえます。

【責任の所在について】

せいりょう園では、例え認知症になったとしても社会人の一人としてベストをつくしていただき、ご本人の意志を尊重するという姿勢で介護をさせていただいておりますが、ご家族にとっては、出来るだけ何事もなく安心安全に生活を送って欲しい、と願っていることだと思えます。

ご本人の出来ることを尊重するということは、同時にご本人の負うべきリスクについても一生活者としてご本人に引き受けていただきたい、と考えています。出来ていたことが出来なくなる、という老いの自然現象の中で、ご自宅で起り得ることについては、生活の場所であるせいりょう園でも起り得ることである、とご理解いただければと思います。

感想

私は、出来るだけ走って通勤をしております。つい最近、帰っている道中で派手に転倒してしまいました。何年かぶりに前のめりに転倒してしまいました。すぐに、周りの方が駆け寄ってくださったのですが、やせ我慢で「大丈夫です」と言って何事もなかったかのように走り始め、道を曲がった先で座り込み痛みに悶絶してしまいました。いつもはないはずの場所に工事により縁石ができており、そこに足をひっかけて転倒したのです。普段ならまたぐことが出来るのですが、その時に限ってよそ見をしながら走っていたのです。転倒した瞬間は、縁石を恨みました。誰だ！こんなところに縁石を作ったのは！石に向かって怒りましたが、そもそも自分がよそ見をしていたことが悪いのだと、自分に責任があるのだと思い、怒るのを止めました。

せいりょう園では多くの実習生を受け入れています。実習内容は主に利用者の生活の中に身を置き観察をしていただくことです。普段の生活の中では、車椅子の利用者が急に立ち上がったり、机の端を持ちながら伝い歩きをするなどの場面に遭遇することがあります。見るからにふらつきがあり、不安定な状態で歩行している姿に実習生は心配になり利用者の元に駆け寄り椅子に座ってもらうように利用者に促します。それから、その方のことが心配でその場を離れなくなってしまい、実習どころではなくなってしまいます。

実習生は、利用者が危険な状態で歩行しているのに、職員が助けないことに対して不思議に思います。私たちはご本人の普段の様子を観察し、どこまでの生活力、身体能力のある方なのか、どのような行動をとっているのかを把握しています。一見、何もしていないように見えますが、ご本人の意志を尊重しながら行動を見守っています。そういった状況下で転倒のリスクはゼロではありませんが、それは私たちの生活でも同じことなのだと思うのです。リスクを負い日々チャレンジしながら過ごすことに生活者としての醍醐味があり、質の高い生活があるように思います。



～エプロンおばさんのグループホーム記～

せいりょう園グループホーム（憩の家）
津吉 万葉



「普通に働き普通に暮らす、穏やかで平凡な幸せ」は、目立たず評価されにくいものですが、自分に等身大の自信を持ち、自分の持っているもの、手に入れてきたものに無意識のうちに感謝しながら、今をまさに満足して生きていらっしゃるＹさん。これが、Ｙさんの生活歴に何の知識も先入感も持たずグループホームで調理の傍ら見守り続けてきた私の眼に映るＹさんの姿です。

「私には何も自慢するものはないから」と、常にお話仲間の聞き上手に徹する反面、適切な一言で、言い争いを即座に仲裁する見事さに、思わず調理の手を止め拍手を贈る事も度々です。

小さな幸せを幸せと感ずることのできる感受性や如何なる物にも侵され難い大らかさは、遠距離にも拘らず折に触れご来園下さる三人のお子様とＹさんが培ってこられた信頼関係の賜物であろうと独り頷く私です。「憩の家」を中心に各々の位置から集い、思い思いの姿勢で寛いでいらっしゃる（お茶をお届けした時垣間見た様子です）ご家族の姿は、「憩の家憩の間」そのものです。

老若男女を問わず「自分を大切に思ってくれる人が傍にいとを感じるだけで人は穏やかになれるもの」と一見簡単な様で気付きにくい哲学を、私達介護に携わる者に発信し続けて下さるご家族の存在に頭の下がる思いです。

一分の隙もない適切な介護も大切ですが、人間対人間である事を忘れない優しい眼差しの大切さを再確認させて下さるＹさん、いつまでも「今を幸せに進み行く貴女でありますように」グループホームの全員が、貴女を応援しております。

【追記】

常に自然体であるＹさんに、「様」の敬称は相応しくないと感じ、親しみを込めて「Ｙさん」と記述させていただきました。



◇居室（憩の家）にはバス・トイレ・ミニキッチンがあり、ご夫婦でも入居できます◇

【グループホーム入居申込受付：せいりょう園 Tel（079）421-7156】

～U・Yさんの看取りについて～

せいりょう園グループホームまどか
主任 中本 恵子（介護福祉士）

U・Yさん（男性）は平成19年11月90歳・要介護2で入所され、亡くなられた時は、95歳・要介護1でした。

入所された時より帰宅願望が強く、毎日のように「自分で何でも出来る。息子が勝手にこんなところに入れた。息子に連絡してくれ。家に帰る。」と、家族に迎えに来てもらう電話を頼まれました。部屋で過ごされる時はダンスの中をゴソゴソされていて、メガネ・時計が盗られたとよく訴えられていました。その剣幕は尋常ではなく、男性ということもあり、女性職員は怖い思いをしたこともあります。夜勤時は特に、怖い思いでストレスとなることもありました。暖かくなってくると痒みの訴えがあり、これもまた対応に悩まされました。入浴拒否も強く悪戦苦闘し、浴槽の中に1時間程入っておられますが、身体や髪を洗うことがほとんど出来ませんでした。また、チェック柄の服を「わしの服を着やがって」と着ている女性利用者に文句を言い、説明も聞き入れてもらえず、仕方なく女性利用者には服を脱いでもらったこともありました。そのため、その後はチェック柄の服や膝掛けは使わないようにしました。でも、機嫌の良い時は女性職員を、飲み屋のように「ママ」と呼んでいました。職員側もUさんの対応に慣れてくると、外出時や入浴時には、ダンスの中からメガネや時計をすぐに見つけ出せる様にしていました。

Uさんは毎日散歩に出かけるのですが、よく落し物を拾ってきました。たばこ・スカート・学生のコート・水筒など小さなゴミの様な物から警察に届けた物までありました。散歩はコースが分かっていたのであえて付添いはしなかったのですが、30～40分して帰られなかったら見に行く様にしていました。しかし、平成24年4月29日外出先で転倒され救急車で搬送されてからは、後ろから見守りをしていました。足取りもだんだん弱っていましたが、転倒後も散歩は続き13時30分頃に行くことが多く、ちょうど職員の昼食時なので食事途中で見守りに行かないといけない時もありました。

そんな中、1年程前から腹痛の訴えがあり、便秘気味だったので下剤を使い様子を見ていました。そして、10月14日強い腹痛と発熱があったので受診し、ただの風邪と診断されました。でも、痛みが治まらず再度受診すると血液検査の結果から悪性リンパ種ではないかと診断されました。その時点で家族と話し合い、「最期までまどかで」ということになりました。それから痛みのない時は散歩され、食事も残さず食べておられました。元々好き嫌いのない方で、きれいに召し上がる方でした。

11月29日も外出され、11月30日は入浴されました。その夜から激しい腹痛や下痢、嘔吐、発熱があり着替えが足りなくなり、家族に着替えを持って来ていただきました。そして家族がご本人の様子を観て覚悟され、「もう長くないな」とおっしゃられました。

これまでUさんの介護拒否もあり、思うように出来なかったことがありますが、この時は私たちの介護を受け入れてくださいました。そして、ダンスの中を整理していると色々な事が頭の中に浮かんで来ました。

激しい痛みや高熱で相当苦しかったと思いますが、「もういい、ありがとう」と話され、最期まで起き上ろうとされていました。平成24年12月5日午前2時25分、夜勤者に看取られながら、息を引き取られました。生前よく髭剃りをすると「ひょっとこ前（男前）」と冗談を言っていた時の穏やかな顔でした。そして、寝たきりの生活が5日間程の短い期間で最期を締め括ったのはUさんらしいなと思いました。

今までの看取りは女性で、徐々に食べられなくなり、体力も衰えて最期を迎える方ばかりでしたが、この度初めて男性でしかも癌末期の方を看取り、とても良い経験になりました。



餅つき（12月26日）



毎年恒例の餅つきが今年も尾上町の松風会の方々のご協力により開催する事ができました。

ついたお餅は「きなこ」「あんこ」「大根おろし」で頂きました。

やはりつきたてのお餅は美味しく利用者の皆様にも喜んでいただきました。

世代間交流（12月28日）

せいらいよう園職員の子供たちが、冬休みを利用してデイサービスの利用者の方々との交流を図りました。

この日は、お正月の準備で「もち花」を一緒に作りました。子供たちも初めての作業ですが、普段とは違う時間の過ごし方ができました。



I. ケアハウス等空き情報 [平成25年1月15日現在]

・ 恵泉	: 1人部屋若干	・ 第二ケアハウス恵泉	: 1人部屋若干
	: 2人部屋若干	・ 虹比ヶ谷 はりま	: 1人部屋1室
・ ケアハウスアゼリア	: 1人部屋6室	・ 青山苑	: 1人部屋3室
・ キャッシル真和	: 1人部屋2室		: 2人部屋2室
・ むれさき苑	: 1人部屋1室	・ 香楽園	: 1人部屋5室
・ ネバーランド	: 1人部屋3室	・ 清華苑湘パ-ライフ	: 1人部屋1室
	: 2人部屋1室	・ めぐみ苑	: 1人部屋2室

II. せいらいよう園空き情報

- ①ケアハウスせいらいよう園：3室（バス・トイレ・キッチン付 25㎡）
- ②リバティかこがわ：4室（バス・トイレ・キッチン付 33㎡・35㎡）
※サービス付高齢者向け賃貸住宅登録申請中



【問合せ先】 せいらいよう園介護相談室 TEL(079)421-7156/(079)424-3433